「腕を上げたとは思ってたが、これほどとはな。今回はいいとこないぜ」

激しく肩を上下させながら真山が言った。

「心配するな。次は無い」

硬玉のような目を瞬くことなく、堀川は真山の前に立った。

「これで終わりだ。なにもかも」
「なにも…かも、だと？」

向き直ろうとして、真山は膝を地に落とした。
足から力が抜けてしまっていた。
道を叩く雨の飛沫が目に、口に、容赦無く飛び込んでくる。

「貴様、死ぬ気か」
「死ぬ？　俺が？」
「蝋燭の最後の輝きって奴だ。命を捨てた者の拳は…剣は、生きようとする者には見切れぬ。俺の師匠がそう言っていた」
「…」
「殉君が死んだら、貴様も死ぬつもりなのか、鴉」

雨がますます強く二人を叩いた。
常人なら目も開けていられない風雨の中で、男達は睨みあっていた。

「俺は戦いだけを糧に生きてきた。だが何の為に、誰の為に生き残ってきたのか…　今までそんな事は考えたこともなかった。答えは１つだ。殉のため、殉を生かす為。それしかない。お前の言う通りだ。殉が死ねば生き残る理由も消える。死ぬ気は無いが結局は同じことだ。生存への執念を持たぬ兵士はとっとと死ぬしかない。それが戦場の掟だ」

堀川の声には何の抑揚もなかった。
ただ淡々と事実だけを告げている…そんな感じであった。

「その前に、お前との決着だけはつけておかねばならない。ただ一度、俺が敗北を喫した男。真山　悟。愉しかったぜ」

ククリナイフがゆるりと頭上に降りあげられるのを、真山はただ見ているしかなかった。
反撃する力は残されていなかった。

ここまで、か
悪い人生じゃなかったな

目を閉じ、闇の訪れを待った。
その時だった。

豪雨に割り込むかのように、けたたましいクラクションの音が響き渡った。

「真山さんっ！」
「先輩っ！！」

二人の脇に急停車した白のクラウンから、２つの人影が叫びながら飛び出してきた。

「九十九…加夏子ちゃん…どうして…」
「まだ死なれちゃ困るからですよ、二人ともね」

あっという間にずぶ濡れになりながら、九十九は真山を抱え立ち上がらせた。

「何しにきた。邪魔するなら３人とも斬る」

堀川の声は氷の冷たさだった。

「勝負ありだ、堀川さん」
「…どけ…」

真山を支えながら、九十九は堀川と対峙した。
激しい雨に顔を歪めながら、それでも目線は逸らさなかった。

「貴方は真山悟に勝った。剣を降りおろす必要はない」
「どけ、といってる」
「ここからは別の戦いだ。貴方の戦場は終わったんです、おやめなさい」
「戦いがいつ始まり、いつ終わるか、何を勝利と呼ぶのか。誰にも判らん。剥き身の命を戦場に晒した者だけがそれを決める事が出来る。しゃしゃり出れば流れ弾に当たり死ぬだけだ。アンタの事だよ、先生」

無表情なまま、堀川のククリナイフが雨を裂く。

状況終了ぉぉぉ！！！

九十九の大喝が、堀川の五体に文字通り炸裂した。
ククリの切っ先が彼の頭で止まった。

三人はそのまま動かなくなった。

「聞いて！　ジュンが助かるかも知れないの！　アナタの骨髄を移植すればジュンを助けられるかもしれないのよ！　こんな所でチャンバラやってる場合じゃないの、お願い、一緒にきてっ！」

動かぬ姿勢のまま、堀川は目だけで加夏子を見た。

「移植か。肉親が一番、適合の可能性が高い。だが１００％じゃない。勝算の見えない戦いに興味は無い」
「バカッ！　なにカッコつけてんのよ！　たたかいじゃないの！　自分の弟の命がかかってるの！　助けたくないの！？」
「人はいずれ死ぬ。早いか遅いか、違いはそれだけだ。俺は忙しい、邪魔するな」
「ふざけんなぁ！！」

ずかずかと歩み寄った加夏子が三人の間に割って入ると、切っ先をつかんで引きずり降ろした。
堀川は目を剥いて加夏子を見た。ナイフを引き抜こうとはしなかった。

「戦場だの勝算だの、アナタ自分に酔ってるだけじゃない！　そりゃ世界中どこいってもセンソーしてるわよ、だからなに！？　誰がアナタみたいな弱っちい男に戦ってくれって頼んだよ！　アタシを斬って、真山さんを斬って…　刀もってなきゃマトモでいられないフニャフニャ男がエラそうに人の生き死になんて口にするんじゃないわよっ！！」

運転席を出て飛び出そうとした恒彦。
庇おうと足を踏みだしかけた九十九。
傷だらけの真山。

その場の全員があっけにとられて加夏子の啖呵を聞いていた。

おれが…

よわい、だと？

「そうよ！　よわいわよ！　ジュンが死ぬかも知れない、そう思ったらいても立ってもいられなかったんでしょ！？　だから真山さんを呼び出した。この国で、アナタみたいな人と気楽に殺し合っちゃってくれるのなんて真山さんしかいないから、そうでしょ！」
「……」
「助けりゃいいじゃない！　おとうとなのよ、何が恥ずかしいのよ！？　何十人、何百人も殺してきて、たったひとりの弟だけ助けようとするのがそんなにみっともないことなの！？　いのちってさ、助けなきゃドンドン死んでっちゃうのよ！　そんな事アタシよりよく知ってるでしょ！！」

洪水のような加夏子の言葉が、豪雨に重なる。

誰も動かなかった。
濡れネズミが５匹、埠頭の中程で固まっていた。

堀川の腕から力が抜けた。
加夏子が切っ先を離すのと同時に、鈍色の山刀は小さく飛沫をあげて路面に落ちた。

「…」

堀川が天を仰いだ。何か呟いている。
誰の目にも映らぬ者へ、彼は語りかけていた。

アリ…
やられたよ
こんな小娘に、いいように怒鳴られちまった

水煙の向こうに影が浮かんだ。

レトゥよ
恥じることはない
この世の始まりから、女は強きものなのだ

ケロイドに覆われた醜い顔が苦笑した。

男を産むのは女だ
この世で一番、大地に近き生き物なのだ
わしらにはかなわん。そんな事も知らんのか

やかましい、とっとと成仏しろと堀川が呟くと、影は消え、また別の男の姿が浮かんだ。
迷彩服の若い男。レンジャー訓練中、狂った教官に惨殺された男だった。
陸上自衛隊時代に堀川の部下だった男。

小隊長
自分は小隊長を信じます
一緒に山を降りましょう、あと少しです

…杉山。俺はお前を守れなかった。
それ以上に殺しの悦びを知っちまった。
馬鹿な男なんだ。もう憑いてくるな。
堀川の言葉に、迷彩服を纏った若者は満面の笑みで答えた。

自分はいつでも小隊長の命令に従います
あなたは、最高の指揮官でした

影は消え、あとは漆黒の闇に雨が吹き荒れるばかりだった。

「堀川…さん？」

加夏子が、天を仰いだままの堀川に声を掛けた。

「いくか。殉が待ってる。満足したよ、俺は」

顔を降ろした堀川は、誰にも見せたことのない静かな笑みを浮かべていた。